

令和2年度第1回宮崎県社会教育委員会議

【議事録】

令和2年6月30日(火)
宮崎県庁4号館4階委員会室

事務局からの説明：昨年度の協議内容の確認と今後の協議の方向性について

テーマ：「楽しもう！広げよう！つなげよう！ライフステージに応じた学びを地域づくりへ」
～縦の接続と横の連携の充実を通して～

協議（Aグループ）

横の連携の充実 ～多様な主体との連携・協働～

委員

地域の実情に立った連携・協働の在り方、地域人材の活用、育成について現在の取組を紹介して欲しい。

〇〇町では、コミュニティスクールでいろいろな団体が集まって、学校の連絡会を作っている。学校運営協議会を設置し、いろいろな団体で、子どもたちのために何ができるかを話し合った。昨年度、〇〇の町が好きだという子どもを育てようという理念を決めた。具体的には、〇〇の人が好きだ、〇〇の自然が好きだ、〇〇の歴史や文化が好きだ、〇〇の行事が好きだ、〇〇の仲間が好きだ、〇〇小学校が好きだ、〇〇中学校が好きだという子どもを育てようということになった。自分の住んでいる地域について知ろう、親は子どもを地域の行事に参加させよう、学校は保護者との共通理解を図ろう、という重点目標を定めた。

公民館では、登館日を設け、学習や体験活動を行っている。高齢者クラブは、ふれあい農園でサツマイモ作り、昔の遊び等で学校に貢献している。JA 青年部は、米作りをしている。商工青年部は朝の見守り活動、よい子学習塾をしている。子ども会は、子ども駅伝大会、リーダー研修をしている。学校支援センターは、学校支援ボランティアを学校の要請にあわせて派遣している。

委員

学校では、地域の高齢者と継続的に行われているせんだん祭りで昔の遊びを行い、コツを教えてもらったり、昔の話をしてもらったりしてふれあっている。JA 青年部の協力で田植え、稲刈りを行っているが、この際にも地域の協力を得ており、地域とつながっている。

委員

〇〇町は、民生委員、挨拶ボランティアに来て頂いて学校で挨拶運動を行っている。

読み聞かせボランティアが読み聞かせを行っている。交流学习では、〇〇町を好きになるという目的の下、町探検や昔の遊びで地域の協力を得ている。

また、町内には伝統があるため、研修を行ってもらっている。

委員

多様な主体との連携がなかなかつけれない。どういう子どもたちを育てたいのか、自分たちの地域をどうしたいのかをしっかりとつくり上げていかなければいけない。協議会で目標をつくり上げないといけな。多様な主体の目標もある中で、あわせて目標を一つつくり上げていくことがなかなかない時代なので、無理矢理でもつくり上げていかないといけな。

JA 青年部で十数年食育担当として5年生と米作りをやっていたが、すべての作文が大変という言葉しか出てこない。農業の大切さ、素晴らしさを伝えておかないといけなかつた。農業に対するイメージがある上で、話を聞き、実際に大変な作業をする。子どもたちは自分たちが想像していた農業が確信に変わる。子どもたちをどういうふうに育てたいか、どういう消費者を育てないといけなかつたかと思、最

委員

近は、食育のあり方を変えている。

多様な連携を進める上で、大切なのは、地域住民と学校がこんな子どもを育てたいというテーマを設定し、それを共有すること。共有できる子ども像を設定することが大切である。設定できれば、社会教育関係団体それぞれの強みをもって取り組むことができる。共有できるテーマをいかに設定できるかにかかっている。

委員

地域と連携していない学校はないと思う。何が一番よくないのか、子どもが学校で体験してきたことを家庭でできていない。宿泊学習で行滕山に登り、達成感を味わっていると思う。家庭で行滕に登らないかと声をかけると「きつい」と言って登らない。学校でやっていることを授業ととらえ、その後家庭で続いている。農業体験にしても、学校で体験した後、家で育ててみようかということになれば、つながると思うが、切れてしまっていることが良くないのではないか。

〇〇市も何か、指定校になると3年間力を入れてということがある。3年の間は活発であるが、3年を過ぎると下火になるということもある。その後も続くようになるとよいと思う。関わっている人は話を聞く機会が多いと思うが、一保護者となると、なかなかライフステージに応じた学びを浸透させるのには時間がかかると思う。意識付けがうまくいくようになるとよい。

委員

学びというとかしこまった感じになると思う。違う感じになるとよいのではないか。

それぞれの市町村でやり方があると思う。〇〇市は、6、7つの協議会がある。地域と学校の団体である。〇〇地域は、小学校2つと中学校1つである。高学年を対象とした記紀の道を歩こう会を実施している。地域づくり協議会が旗振りをしている。PTAも関わっている。

〇〇市は子ども会育成協議会が県内で一番活発で、敬老会では、子どもたちが歌を歌い、肩たたきをする。親子会の中の子ども会で行滕山に行き、自然の家で2泊3日のキャンプを行っている。参加者は200名を超える。リーダー研修も行い、ジュニアリーダーがリーダー的役割をしている。行く前は泣いていた子も3日目にはまだ居たいと言う。体験活動は大切と思う。いもづくりも行っている。砂と土の違いがわかる事が目標である。違いがわかると理科と数学の勉強になる。これを最初に結びつけるのは農家さんの仕事である。大変な仕事でありつつ、誇りをもってやっている。それを子どもたちに少しでもよいから感じ取ってもらいたい。いもほり楽しいでもいい、土と砂の区別さえつけば。これからは、学校だけではしんどい。

2年前から働き方改革が具体的に出てきた。PTA活動に今までは先生方がお手伝いしていた。朝の挨拶運動を先生にお願いすると、時間外労働になる。子どもたちの自立のために、保護者と子どもたちだけですることになった。PTAは学校行事のお手伝いもしなければいけない。学校側とPTAの区別も難しくなった。そこで、地域づくり協議会や学校運営協議会にお願いすることも出てくるが、丸投げはいけない。ここは自分たちで、ここはお願いする。自立独立した上でお願いすることが、子どもたちに対する見本として背中を見せられることになるのではないのかなと考える。

委員

今、働き方改革という話が出たが、〇〇町でも〇〇市を参考に「〇〇はげまし隊」を始めた。中学校数学の学習支援に入っている。先生の役割はせず、あくまでも補助である。

また、小学校では、3年生の総合で、6班に分かれての校外学習があった。学校から班に付く4人のボランティアの依頼があった。ちょうど震度5の地震があり、校長先生が心配したものの、ボランティアがいたことで、安心して学習を続けることができたという声を先生から聞いた。ボランティアの高齢者にとっては、子どもと話しながらの行き来がよかったようである。このような取組もある。

委員

〇〇市の場合は、地域づくり協議会があるが、他の市町村でもそういった組

織や団体があるのではないか。各地域のいろんな団体を洗い出してみしてほしい。そういった団体に気付くと考えも広がるのではないか。知らないことがもったいない。

委員

〇〇市の場合は、まちづくり推進協議会有り、関係者が集まって、まちづくり、地域づくりに取り組んでいる。やはり、こういった組織があれば、地域での連携・協働は進めやすくなるのではないか。

県内26の自治体の中で、このような組織はどれくらいあるのか。また、まちづくり推進協議会に代わるものとして学校運営協議会有り。このような組織を生かして、関係者同士のネットワークをつくるのが大切である。

委員

〇〇市の地域づくり協議会は10年くらい前にでき、準備に2～3年かかった。当時は、地域づくりという市役所がすることの丸投げではないかという反発もあった。

このような組織には、中核となるコーディネーターが必要となる。〇〇市の〇〇地区のコーディネーターは、一度既存の組織を解体し、その地区にあった組織を再構築したという事例もある。形はそれぞれの市町村に合った組織が望ましい。

委員

〇〇市にも〇〇地区地域連携組織があり、昨年度は講演会等を行った。3年目を迎えるが、今年度はコロナの影響でできていない。7月からは登下校時の「あいさつ運動」に取り組む予定である。〇〇市の場合は、総合政策課に事務局があって集落支援員がおり、子どもたちにどんな地域にしたいかをスローガンとして考えさせる取組を行う予定であると伺っている。

委員

市町村には各種団体、社会教育関係団体、社会福祉協議会など、様々な団体がある。なかには、組織が重複しているものもあるので、スリム化できないか。そうすると、ムリ・ムダがなくなる。

委員

〇〇町は、学校支援ボランティアのリストを作っている。

委員

学校教育の中で、人材育成をしていく必要がある。〇〇小学校の学校評議員をしていたが、入学式・卒業式に参加できたことが楽しかった。入学式の1年生が、6年経つと卒業式できびきびとした動きを見せてくれる。

自分の犠牲なしに社会はよくなる。最近は農家の方も忙しいし、青年部の若者も、なかなか地域に出てこない。親が若者に出るなどということもある。

地域に出て頑張れる子ども、地域貢献できる子どもを育てないといけない。間違った地元学ではなく、子どものうちに本当の意味の地域人材を育てる必要がある。そういった子どもたちを育てるには、親が頑張らないといけない。

現状は、地域で出てきて頑張っている人が少なくて、その人たちが疲れてしまう。頑張っている人を評価してくれる人の存在が必要である。今は、地域に出てこない人の方が趣味などを楽しんで豊かな人生を送っているという現状がある。教育と評価の2本セットで立て直していかないと、利己的な社会になってしまう。

委員

昔は、祭りが盛んで毎年楽しみにしていたが、〇〇地区は、祭りがなくなった。太宰府は学校が祭りに協力的で、子どもたちに祭りに出なさいと呼びかけている。実行委員会に中学生が参加し、中学生がアイデアを出している。御神輿なども子どもたちが入ってくる。その地区は、大学生や大人になっても夏には帰ってくる。世代の縦が繋がっている。

後継者が育っていないと地区の祭りもなくなってしまふ。中学生くらいから祭りに携わっていると、楽しい思い出があるから、大人になっても地域に帰ってくる。

委員

祭りは本来、地域の人間からすると誇れるものである。〇〇市でも太鼓台という御輿があり、4方向に分かれて担ぎ、倒した方が勝ちという御輿がある。

結構ハードな御輿なので、人が減ってきた。いつかなくなるのではないかと危惧している。

時代の流れもあるが、青年会議所、商工会議所青年部などの活動も減ってきている。昔は子どもたちを相手にソフトボール大会をしていたが、今はなくなってしまった。

委員

自分がそういった運営をやらなければいけないという責任感で重くなってしまっていないか。やりやすいように、ボチボチでよいくらいの方が長続きする。最近では、いろいろなことが義務化してしまっているのではないかと。〇〇市の青年部は30年になるが、私たちが変えてきたのは10年くらいで、まだ結果も出せていない。今の子どもたちは行事も多く、忙しい。

本来は食育なんてなくてもよい。問題があるから食育活動をしなければいけない。毎年、いろいろな問題が増えていっている。何も解決しないまま、課題だけが増えている。こういった課題を下ろしたりとか、担ぎ直したりとか、整理する時期に来ているのではないかと。子どもたちも毎日何かあったら疲れる。子どもたちも仕方なく地区の行事に参加しても楽しくない。祭りも今はイベント的なものになっている。昔の祭りは教育効果があった。

多様な団体が、それぞれにいろいろなことをしてしまうと、その都度子どもたちは借り出されてしまう。やることも増えてしまってセカセカした社会になっている。一度入ったらなかなか抜けられないような組織はだめだと思う。

本来は一つでいいはずの組織がいくつもある。この事業をしないと次の補助金がもらえないとかの問題もある。やりたくないけど、やらないといけないこともある。やめてしまうこともいいのではないかと。

委員

学校では、いろいろな団体に支援してもらっている。中には、どういう団体か、なぜ手伝ってくださるのか、分からないまま活動していることがある。

いくつも団体があって、学校にいくつも相談にくる。そういった方々と話す機会があれば、それぞれの対応について考えることができる。

地域の様々な団体の方が率直に話す場があるとよい。そのことでいろいろな可能性が広がる。

委員

県にお願いしたいのは、いろんな団体が年度当初に「こんなイベントがある」というのをアナウンス（広報）できないか。

委員

みなさんそれぞれ、市の委嘱とかで参加されている方も多くいると思うが、だいたい同じ顔ぶれでのことが多い。小学校の評議員でも、何年間もやられていう人もいる。人材育成ということを考えると、行政側も人を入れ替えることを考えることも大切ではないか。人が入れ替わることで違った意見も出てくる。

この人に頼んでおけば大丈夫ということで、メンバーが同じ人になる。周りに目を向けて、違う人に声かけすることも必要ではないか。

委員

地域人材の育成という視点で、公民館で講座を行っている。ただ、講座が終わって、そこで終わりということがあった。育成した能力を生かす場を設定できなかった。能力を発揮できる場を設定できればよかった。

委員

人材の活用という視点で、〇〇市の場合はコーディネーターがいて、講師情報などの情報が得られるので大変助かる。

委員

各種団体の活動する拠点が必要であり、学校の跡地を活用しているところがある。〇〇高校の跡地を活用できないかと相談したときに、県の所有するものを市が譲り受けるには、手続きが相当大変と聞いた。担当に伝えてもらいたい。そういった手続きを簡略化し、市が受け入れやすいようにしてもらいたい。

そうすると各種団体も動きやすくなる。県が邪魔をしてはいけない。

○ 協議 (Bグループ)

縦の接続の充実 ～各世代の学びをつなぐ仕組みについて～

委員

「各世代をつなげる学びの在り方、仕組み」、「縦の接続の充実」について、私たち自身、なぜ各世代をつなげる必要があるのかを共有しておきたい。また、期待する姿を出してもらって、できているところとできていないところ、何が課題なのかを具体的な経験をもとに出してもらいたい。そして、課題をクリアするための方策などを出してもらえたらと思う。

まず、なぜ必要なのかを協議したいと思うが、前に、祭りをやめてしまったら、場がなくなることで世代間のつながりがなくなる、人が流出していったという話を聞いたことがある。

委員

30年くらい前に次々に行事をやめてしまった時代がある。みんな東京に出て行き帰って来ない。今は若者が戻ってきている。それは、今の親が帰って来いと言っているからである。いい大学行って、いい会社に就職すると一生安泰みたいな時代であったので、それを目指してみんな東京に出て行っていた。その過程で、縦のつながりとかをやらなくなっていた。だから、こっちにつながりがないから帰って来ない。つながりを残して町を出て行かないと過疎は止まらない。

委員

縦のつながりをなくしてしまうと、地域コミュニティの存続であったり、地域の運営であったりいろんなところに影響が出てくる。

委員

ふるさとという思いがないといけない。出て行くまでに、いろんなことをして、「ふるさと感」を縦でしっかり育てて、ふるさとを背負って行き、そこで活躍したら〇〇町出身だと言えるようになってほしい。

委員

「ふるさと感」は、縦のつながりで育っていくものである。世代間をつなげる学びというものが重要になってくる。

委員

仕事上、あちこちに行くと九州の人は地域に愛着があり、交流をもつ人が多くて、タクシーに乗ってもタクシーの運転手が「ここ、いいところでしょう」と言う。東北をまわると「うちは、なにもないから」など少し後ろ向きなことを言われる。うちの地域にはこれがあるというもの、「アイデンティティ」みたいなものがほしくて、たとえば、祭り、景色、おいしい水であっていいし、それがあったら帰りたくなる。歴史、文化だけでなく、今やっていることでも語れるものがあると、よそに行ったときにも自分の町のことを語れるだけでも盛り上がると思った。

ベットタウンみたいな新しくできた街のことであるが、伝統とかはないが、お母さん世代が集まって、子育てについて、環境問題について、ゴミの話とか盛り上がっている。地域というキーワードで集まるのも一つであるし、目的・役割とかで集まって徐々に広がっていくのもありかなと思う。そういうコミュニティであれば、どこの地域でもできるであろうから、まず、土地のアイデンティティみたいなもので集まるのであれば、それが目的で集まるのもよい。そういったものが縦のつながりになっていけば、また、新しいものが生まれるのではないか。年代で集まるよりは、目的で集まると世代間でつながる可能性がある。

委員

「つなげる」ことも必要だが、「つながる」ことも重要かと思う。高齢者の団体はあるが、それぞれの団体の活動だけで、地域コミュニティはできないことが多い。それぞれがつながることで地域をつくって一体化し活性化する。自らの主体性を促す働きかけも大切である。

委員

若者の流出をくいとめるのが課題。自分自身、地元にいるいろいろな世代が集まる場所があって、「つながりの場」がつくられている。そこで祭りをどうしようかとか移住された方も一緒に話をされている。県外にいても地元で学べる場、つながる場があると入りやすい。

- 委員 　なぜ、各世代をつなげるのかということ、持続可能な地域をつくっていくことに尽きるのかと思う。子どもは多様な人間と触れ合って交わることによって成長していく。いろいろな世代の方が地域にいることは、すでに学びになる。そのためにも世代間がつながっていることが大事になる。
- 委員 　人材育成、次世代をどう育てるかがいろいろな会でも話題になっている。いろいろな会に参加していると、今、すごくコミュニティがうまくいきはじめていと言われている、若い世代を育てていきたいという温かい姿勢、温かい雰囲気がある。私たち世代がやりたいことを思いっきりできる風土がつくられてきていて、いろいろな場で意見が言いやすくなっている。こういったことが続いていくことが、最終的につながっていくということになっていくのかなと思う。
- 委員 　次世代をつなげる学び、つながる学びをなぜディスカッションして政策に打ち出していく必要があるのか。地域社会、持続可能な社会をつくるためには、次世代を育成しなければいけない、多様な人との交わりの中ででないといけないのではないかとあったところがある。各世代間が影響し合う学びは、高齢者だって生きがいにつながるといった面もある。高齢者自身がこれやってきてよかったと自己肯定感をもらいながら、お互いに様々なものをもらいながら、多様な人とのつながりが社会につながる。
- 委員 　多様な人々というところは、私自身とても意識していて、「人々＝多様な価値観」という構図があって、子どもは学校の先生と親の価値観の中にどうしてもいるので、そこに知らない人がいると、なんだこれとなる。しかし、そこに触れることで悩んでいたことがたいしたことではなかったということとか、そうやって子どもは成長していく。子どもだけでなく大人も同じである。全く違う世界の人と会うことで新しい自分を発見できる。そういうものはすごい学びだと思う。多様な価値観をもった人同士が出会う場があるということは重要だと思う。
- 委員 　多様な価値観に触れることはすごく大切で、だからこそ、縦につながる学び、つながる学びを意識して支援することをしなければいけない。
- 委員 　次に、「なぜ難しいのだろう」という、現状や課題について事例を出しながら意見を伺いたい。
- 委員 　課題として、人口が減って田舎の方で起こっているのは、少子化ではなく過疎化によって起こる子ども減少化である。子育て世代が過疎化によって地域にいないので、子どもが産まれてこない。人が少ない中、限られた人でやらざるを得ない。
- 委員 　総務省が今、関係人口と言っていて、その研究の一環で地域の人が減っていく中で関係人口を使って活性化していこうとしている。〇〇学校の生徒は一回住民票を移すので、〇〇町民になる。卒業しても〇〇町の関係人口になるので、卒業後も関係するようコミュニティ大学など仕掛けていこうとしている。オンラインの講話、全8回の講話をして、〇〇町の地域課題を考えてもらって、政策提案をしてもらう。その提案の中で優秀事例には、予算をつけて実行までしていこうとしている。こういう仕掛けをして、卒業した子ども達が〇〇町について考えてもらって、将来、自然学校で働きますとか、地域おこし協力隊をつかって起業しますとか、そうやってつなげていければいいと思っている。
- 委員 　そもそも人口が少なく増えない中、限られたコミュニティのなか特有の、発展性やつながりの難しさという課題もある。それに対する仕組み作りという部分で、研究が行われている。それを実際に実践すること、形にすることで、学生達が〇〇町やふるさとに対する意識をもってもらって、〇〇町とつながり広めていってもらっていいようにしている。世代間のつながりを維持しながら横のつながりも考えていけないといけない。

委員

つながりをつくっていくとしても、自他ともに楽しく、前向きにする要素をいれるべきだと思う。でなければ、今は、自分のことしか考えていない人が多いので、そういった中に入ってこない。

委員

みなさんの実践のように地域の宝を生かすことが大事だと思う。子ども会が疲弊しているところがあって、人材が不足している。従来の領域を超えて、他の地区と連携していくことで活性化した事例がある。従来の枠組の中でしか考えていなかったが、そういった枠組を超えていくような考え方も今後必要となってくると思う。

委員

田舎と都市部とではちょっと違ったところが出てくる。

委員

公民館で学ぶときに、子育て世代が学びたいときに託児を地域の方が担ってくれる、そういった連携、つながって学ぶようなことができるといい。それとコーディネーター役がいるかいないかとでは違ってくるのかなと思っている。高校生と社会人をつなぐ活動を行っているが、そこでも、自分達の生活領域だけでは得られない情報と社会や社会人をつなぐようなコーディネーターは必須なのかなと思う。〇〇委員がやられていることもコーディネーターなのだろうかなと思っている。

委員

一番大変な役なのだろうけど、そういう人がいないと難しいと思う。

委員

今の時代、損得勘定が働くので、その部分が課題なんじゃないかと思う。

委員

自分がつながれないようなときに、コーディネートする人がいることによって、人をつなげていくといった部分が必要である。村ならみんな知っているからなんとかなるようなところもあるが、宮崎のような町だと自分たちの生活の範囲でしか分からない。思わぬところでつながれば思わぬことができる、そういったことをよく知る人がコーディネートすることが重要である。

委員

そういったことをする人材を発掘することも鍵となってくると思う。

委員

場所と機会がないと結びつきようがない。〇〇町は学校という場があって、行政等が町の人とかがかかわりあう機会をつくって、コーディネートする人がいるから、上手くまわっているのかなと思う。身近でいえば、公民館もそういった場になると思う。イベントをしますという機会をつくって、すでに公民館に来るという文化が身に付いている人にも来てもらう。そういった人にコーディネーターではなくて、「今度こんなことしますが、どうですか」という声かけをするだけで、張り紙ではなく、声かけだけで考えようかなとなる。場所と機会とコーディネートというのがキーワードになるのではないかと思う。ラインやツイッターというのも場所、コミュニティだと思う。そこで何かをやろうという話になっていけば、それも場所、機会、コーディネートになる。体育館では、ママさんバレーや子どものバスケット、部屋では講座みたいなものやっていて、それぞれ自分の目的で集まっているけれど、普段つきあいのある場所で行うと、何もなくてよりとつきが早いと思う。

委員

場所ということでは、宮崎では身近にある公民館をどう生かすかが一つの鍵になってくるのではないか。

委員

婦人会が消滅していたが、復活した。なぜかといったらライングループで復活したらしい。はじめ5人くらいだったのが80人くらいになっている。そうなってくると十分婦人会としての活動ができ、イベントをやったり地域づくりの大会のときも、その婦人会に頼んだら、立派なものをつくったりしてくれた。手を上げる制度で気軽に集まれるのもいいと思う。

委員

最後にこれまでの意見をまとめる。

各世代をつなぐ仕組み作りの検討では、場所、機会、コーディネートあたりがキーワードとなる。そして、その検討において大事なことは、「各世代の人々が自他ともに『楽しむ』『楽しめる』仕組み作り」を念頭に置くことである。